犠牲にされてたまるか！

春闘に寄せる組合員と主婦の手記

これでは"いけにえ" 手当と間違う主人の賃金

四十三才の主婦（港務）

家族は四十三才の主人（港務所勤務）。子供は大学一年の長男に、高校一年の次男。

主人の給料、手取りで四万二千円位い。妻の私の給料は別にないが、ただ家庭内職の手助けをやっている。

少々借り分があり、主人の給料が実質私の手に渡るときは四万円を切る。

低賃金生活の苦しみといってもどういえば良いのか、私の頭の中はやりくりで一ぱいで、それどころではない。

いまやレジャーもたけなわというのに、あそぶ金など給料袋からでてくるのはサラサラない。

主人と暮らすようになってやがて二十年。初めて主人の給料袋を手にしたとき「これでは食べて行けない」と、びっくりした。

主人の父母、それに甥が一人。私たちの間に長男が生れてからは六人家族だった。

当時（昭和二十九年ごろのこと）主人が持ち帰る給料が、手取りで八千円から九千円ほどだった。どう算段して見ても暮らして行くことができず、幸い主人が前からやっていた趣味的なことが生活を補う内職に変って行った。以来主人と二人しての内職で補いながら、生計を立ててきた。

いまだに忘れ得ない想い出がある。長男が生れてはじめての夏、お盆に里帰りするのに、上に羽織るものがなく、そのまま帰っては実家の父母に淋しい思いをさせるし、またいや気がしてきたので、やっと融通してもらった金で、途中洋装店に立ち寄り、上衣を買って、その場で着替えて里帰りしたものだった。

いまは、長男を背に里帰りする私も、もう早や苦にもならず、上衣一枚やっと買えたよろこびも加わって、足どりがかるくなったことを記憶して居る。

あれから二十年、家内での内職をして一生懸命働いてきた。おかげで、昭和三十二年ごろどうやら生活できるようになったのだった。いま考えて見ると、それも組合の力が強かったからだ。

それもつかの間、あの三十五年の激しい闘いに入った。

小さい子供に買ってやりたい物も買ってやれず、一万円生活をやり抜くのに一生懸命だった。

いろんなことにいきどおったり、働く身の宿命のようなものに悲しんだり、あまりの孤独感に淋しさがこみあげてきたり。本当に多くの思い出や、貴重な経験を残してくれた一万円生活だった。全国的な支援を得、意気高く闘った闘争生活の中から学び得たもの、それは何ものにもかえ難く尊いものだ。

人間は、金だけでは生きては行けない。お互いに肩寄せ合って、全国の仲間の支援のうれしさに涙を流しながら、労働歌をうたったときこそ、あふれる笑いがあった。たとえ一万円生活でも、苦にならなかったことを思い出す。

以来、相変らず食えない賃金のため、内職に精をだして働いてくれた主人にもつかれがで、体を悪くしてしまった。職務にかけてもまじめで、決してあいまいな人ではないので、会社をうらむほかはない。

差別されるので、手で持ち帰れる給料たるや、高校卒の青年のそれと比べてもどうだろうか。

毎年毎年差が大きくなっていく他単産の賃金との違いも腹が立ってくる。

まわりには、賃金とは逆に衣、食、住すべてのものがでまわった。子どもの成長がそれに加わって、生計費はふくらんでいくばかり。

今年からは、二人の子供の進学でもっと大変となろう。父親の給料が安いのも知っていながら、やっぱり学校には行きたいらしい。また親も、できるだけ願いをかなえてやりたい。

ただ、体をこわした主人に、このまま内職をつづけさせるのは心苦しい。

三十年近くも勤めながら、世間からは手当と間違えられるような主人の賃金。これでは、資本のいけにえにされているようなものだ。たとえ炭労要求の二万円は、私たちにとって満額をとっても焼け石に水だが、それでもこの春闘で三井の間違った考えを追及して行きたいものと思う。

シワヨセは、まず— 夕食前の一ぱいに

三十二才の機械運転係

家族に妻（二九才）、女児（三才）、男児（〇才）。

私の家の一カ月の生活費は、まず次の通りです。

米（三〇キロ）	五、四〇〇円
副食費	一五、〇〇〇円
調味料	一、二〇〇円
ミルク（六函）	五、二八〇円
ヤクルト	六〇〇円
酒代	二、〇〇〇円
通院代	三、〇〇〇円
新聞代	七三〇円
電気製品支払	四、七〇〇円
生協支払	一、〇〇〇円
石油代	六〇〇円
交際費	二、〇〇〇円
衣服その他	一〇、〇〇〇円
雑費	五、〇〇〇円
以上合計	五六、五一〇円

これに対して、三月十四日に受けた給料は、二十五日出勤、一日組合業務、一日子どもの病気のため欠勤して、手取り三万八千円でした。その内訳は次の通りです。

本務給	四五、五〇〇円
（日給一、八二〇円×二五日）	
残業・深夜業	二、〇三六円
家族手当・精勤賞	二、一〇〇円
組合賃金補償	二、二〇〇円
以上収入計	五一、八三六円

以上の総稼ぎ高のなかから、次のものを引き去られています。

定額・失業保険	三、三一一円
生命保険	一、二一三円
共済会	三、八一〇円
積立・組合費	二、三一七円
ガソリン代など	一、六六一円
診療費	一、五〇〇円
以上計	一三、八一二円

従って手取り総額は、三万八千円となります。（端数繰り越し）

当然ですが、私の家では毎月一万五千円から二万円程度足りません。

そのためシワヨセとなりますが一番最初に来るのは、夕食前の一ぱいの酒です。やれなくなります。

次が生協への支払いや衣服類の購入と雑費。それでもなお足りない時は、ボーナスや、妻がまだ共働きできていた時にたくわえた労金預金ひき出しとなります。

とにかく最低生活を維持するには、あと二万円は絶対必要です。

五月五日、会社は特定休日にしてきましたが、無給ですから意味がありません。そのためかえって賃金が減り、生活がますます苦しくなるばかりです。

いま、週休二日制、祝祭日の有給休みが常識になりつつあるなかで、ポーズだけでそれらしく思わせ、その中身の方は抜き取って与えるなどというテに、私たちはもうダマサレはしません。有給でこそ、休みの意味もあるのです。

物価は上がる。大手商社の物資買い占めが、その上物価を引き上げているのに、政府は物価安定に真剣になって取り組みもせず、下落し続ける人気挽回のため大手商社に嘆願している始末です。

とにかく苦しくとも、全国の仲間と歩調を合わせてガンバリたいと思います。

昨年の春闘の時、スト中止のため出勤した時、新労組員の一人が私の顔を見て、「ああ、五百円もらいそこなった」（三池労組がストをうつと、新労組員に生産褒彰金が与えられる）といいましたが、今年は新労組員の人の口からこんなあやまった言葉が聞かれないよう、十分な対策を立て、同じ労働者として、同じ方向に歩けるように春闘を取り組みみたいと思っています。

（港務所勤務）

低賃金で権威も失墜 思わず出る—「馬鹿にするな」

四十八才の掘進工

家族に妻（三九才）、長男高校一年、長女小学四年。

松を植えるつもりの庭に、ネギや大根を植えた。去年の、春闘の後である。

ともあれ、勤続二十六年、二十二方も出勤して手取りの賃金五万五千円。いつものことながら、馬鹿にするなといいたい。

他産業の労働者との交流で、高校を出て三年の人で手取り六万円との話だった。

炭鉱の賃金の低さは、人に話せるもんじゃない。職場の仲間の息子や娘が他所に就職してゆくと、

つくづくお父さんたちの給料の安さがわかるという。父親としてのひがみじゃないが、余りな炭鉱賃本の低賃金政策が、家における父親の権威まで奪い取っている。

ずぼらもせず、精一杯働いているのに。本当に腹が立つ。

町で、建築業の建具関係の仕事をしている友だちと久しぶりに会った。

閉山続きの炭鉱では、賃上げも思うようにいかないだろうが、建築業も材料の値上がりで仕事がしにくくなった話から、自民党政府の経済政策の失敗、国民生活を考えない物価値上げのことなどへ発展し、いまこそ本当にみんなが腹かかなけりゃ。一緒に頑張ろうぜ、と話がはずんで、ついに一杯。家に帰ったら早速やられた。

「しっかりしてよ。子どもも高校に入って月づき五千円はかかるし、塾に通えばその上四、五千円はふえるのだから、お金の要るばかりよ」

「つかって……

よ、俺も」、といったものの、考えざるを得なかった。

本当に、学資だけでも大変だ。計算して見ると、停年まであと六年一寸だけ。息子が工専に通うとして五年間。とすると、停年まであと一年を残して卒業する。そして、就職してくれれば……。

さいわい工専の合格通知でひと安心したのもつかの間、自分は普通高校にゆくのだといって、わが道へいってしまった。それでも張り切って通学している姿を見ると親として何もいえぬ。

まあ、何年か先きの息子を頼りにするためにも、いま頼られる父親としての権威を高めなければ、どうにもならぬ。

いよいよ春闘も、年金ストライキを皮切りに盛り上がってきた。とにかく炭鉱賃金を打ち破らなければならぬ。

わが家の庭に、大根やネギなどでなく松の木を植えるためにも。

（宮浦鉱勤務）

作業衣までも値上げ 平和協定で押しつける低賃金

三十八才の開発仕繰工

家族に妻（二七才）、女児二人（五才と二才）。

つい先日のこと。ねむたい目をこすって四山鉱の正門をくぐる。

急ぎ作業服に着替え、繰込場まで走った。

途中に、三池商事の売店がある。まだ閉ざされていたウインドに、マジックの走り書きで、坑内作業服をはじめとする保安靴、手袋など一斉の値上がりを報じていた。ビラによると、お粗末な作業服七百六十円だったのが九百八十円に。なんと二百円のアップ。

そのほか、ほとんど値上がり。チクショウ！驚きを通り越して怒りがこみあげて来る。

坑内以外の所では使い用のない作業服。しかも三池商事が一手の独占販売のこの作業服は、これで一カ月間に二回の値上げ。三井鉱山は、一体労働者を何と思っているのだ。

作業服といえば、中小企業でさえほとんどが無償かまたは五割以上の会社負担が一般的な常識になっているのに、こちらでは、しかも春闘のまっただなかでの堂々たる値上げだ。

か？これこそ、三井独占の春闘に対する挑戦だ。

いま私たちはギリギリの生活実態を考えると、ほんとうにひかえめな一万五千円のベース・アップを要求した。他産業・全国的な平均賃金からすれば、私たち炭鉱労働者の賃金は一万円も二万円も下回っている状況のもとでの、ベースアップ要求だ。

このような賃金をさえ、会社の作業服その他の値上げは実質的な切り下げを意味している。

毎日毎日人べらしのすすんでゆく職場で、仕事量の方は反比例して多くなる一方。

三井鉱山は、さも労働者の声を聞くようなポーズ（ZD運動）だけを派手に見せつけながら、実際には働く者の気持ちはいっさいかえりみない姿勢を、突きつけてきたのだ。

この事実は、三池炭鉱に働く全労働者が一致団結して春闘をとりくむ以外に、真のしあわせを手にする道はないことを示しているのだ。

全労働者をあくまで資本のドレイにするために、手足をしばっている鎖となっているものこそ、一部の三池新労組の幹部どもが、会社との間に締結している"平和協定"である。労働者が当然持っているべきストライキ権を売り渡しながら、彼らは民主的労働運動といっている。

ストライキ権を売って得た金は、そのことによって思う存分に労働者からしぼり取った儲けの中の、ほんの一部を分け与えたに過ぎない。六月十三日にやってくるこの平和協定の改訂だけは、新労組員の皆さんも、組夫の皆さんも一緒になって阻止しなければならない。それができてこそ初めて、彼らが言うように、三池新労組を民主的労働組合にすることができるのだ。

春闘の中で、そのための勇気をふるい起こし、決意を固めよう。三池炭鉱の全労働者が、真に労働者の立場に立つことこそ、春闘を闘う上でもっとも重要なことであることを、心から痛感したその日

高額回答が相次ぐ

春闘 4月末にスト集中

【連合】春闘は四月十七日の五十三単産三百五十万人の年金統一ストの成功についで、いよいよ月末決戦の大づめに突入する。

出足から好調であった回答は四月十四日現在、一万三千円以上が九百四十七組合（昨年は百三十組合）で引き続き好調。先行組合の全国金属では、東亜バルブ二万一千円、岡村バルブ一万七千円などで二万円相場にあと一押し。化学関係では塗料が出足が早く、イサム塗料一万七千三百円、日本特殊塗料一万七千円、大信ペイント一万八千円など二万七、八千円台の回答。同盟の海員組合は相つぎ妥結、昨年を四千円ぐらい上回った。

民間各組合はこのあと二十一日まで回答追い上げの集中ストを闘い、私鉄、国鉄など全交運と公労協の月末決戦は二七、八日に。